

春は來ぬ有るかなきかのわが生よこの天地によみがへり來ぬ
なまぬるき風の吹く日よ中國の山もかすみてたゞになつかし
轟々と上り列車の來る毎に乗りて行きたやかの東京に
木蓮のつぼみはやゝにふくらみぬやがて咲く日は子等のいつる日
業成りて子等は出で行くこの三年はづかしや吾何をしへけむ
あやまちの一つ消えてはまた一つふえては消えて消えてはふゆる
南の果に教の鞭とりしこの二年にやつれたる君
父の如く母の如くに頼みます君のはらからさぞな歎かむ
幸うすくやつれし身をばなよく窓になげかく君に涙す
今にして思へば遠き五百里の末には君をやるまじものを
四首宮川君御病得て琉球よりかへりたまふを迎へて

◎かたをなみ

賛助員 山下 さい

鳴りいでし時計のおとを數へつゝつかむことはをふとわすれけり
おとなしくまかるゝまゝにチクタクと時計はありぬ文机のうへ

夕されば山なす白きネル積みてちまたの霧に消えゆくゝまる
こぼれたるミルクのゆくへみてあればま黒き土に泌みいるなりけり
しつとりと黒みわたれる土の上すばかりぬく水仙のあを
軒近き密柑の枝のをちかたに朝はかすめるかつらぎの山
足もとにこぶるが如くよせゝぬ和歌の浦へのそのかたをなみ
ましろなる練りぎぬしぼるさまにして山かげに入る雲のいくすぢ
つやゝかにねりぎぬのごとひかりたり春の日あびてたゞよへる雲

